



TITLE:

林則徐の對英抵抗政策とその思想

AUTHOR(S):

田中, 正美

CITATION:

田中, 正美. 林則徐の對英抵抗政策とその思想. 東洋史研究 1979, 38(3): 420-448

ISSUE DATE:

1979-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153750>

RIGHT:

林則徐の對英抵抗政策とその思想

田 中 正 美

はじめに

- 一 守戦の思想と抵抗の主體
- 二 水勇の重視
- 三 廣東防衛における砲・船・水師
- 四 近代兵器の採用と皇帝批判
- 五 民衆依據と守戦論の歸結

——むすびにかえて——

はじめに

アヘン戦争がわが日本の幕末明治維新史に及ぼした影響には測りしれないものがあり、とくに政治・思想・軍事・外交の面で、この戦争の影響を抜きにして論ずることは、片手落ちの憾を免れまい。このような意味で、最近中國研究の側から出された増田涉・小島晉治氏らの勞作^①の意義は、まことに大きく、また小島氏が、中國近代史の研究を、日本のそれとの關係で考察することの重要性について、根源的な省察を加えておられるのには、深い共感を覚える。筆者も、いずれはこうした方向を目指したいものと思う。ただそれにしても、筆者の日本近代史研究に關する能力の限度の點は一應措くとして、アヘン戦争とくにその主體的象徴ともいふべき林則徐についての歴史像を、できるだけ克明にしておくことが、これからの筆者の課題にとって不可缺の前提である。

本稿では、林則徐のイギリスに對する抵抗政策とそれを支える思想の特質を、軍事的な面を主として、またあわせて思想の進歩性を規定する歴史の要因を念頭におきながら、若干の考察を試みることにした。

一 守戦の思想と抵抗の主體

廣東在任期における林則徐の抵抗政策の歸結點を示していると思われるのは、道光二十年九月十六日（一八四〇・一〇・一二）發（九月二十九日—一〇・二四到京）の「密陳夷務不能歇手片」である。この片（正奏に同封した附帶上奉文）は、林がすでに、「イギリス艦隊がさきに天津に赴いて請願書を上呈し、それは直隸總督琦善を経て天子に轉奏され、すでに彼らには廣東に赴いて講和を求めることがゆるされており、また、敕命によって琦善は欽差大臣となり廣東に來て事件を處置することになった」^⑤事態を知っており、加えて、ほぼ同じ時期に彼の對英政策に對する皇帝の徹底的不信と激怒の殊批に接したばかりであるという、權力的地位の上からも個人的心情においてもほとんど絶望的といえる狀況のもとで書かれていることを理解しておかなければならない。

それにもかかわらず、林はこの片の冒頭で、一身の咎よりも國體にかかわる大事という平素の信念からどうしても皇帝のために見聞の及ぶところを具申せずにはおられない、と申し述べ、また終段では、國家の御役に立てるなら「頂踵捐糜」しても決して惜しまない、罪を負ったまま浙江に赴くことをゆるされれば必ず「血誠」をつくして（失地の）奪回をはかり罪のつぐないをしたい、と訴えている。そこには一身の咎という小事を超えて「國體」の大事もしくは「國家」の利益のために「全身を潰滅」させても悔いなしとする殉國の至情と、對英抵抗に關する「血誠」の決意が、不退轉ともいえる迫力さえ伴って披瀝されているのであり、これらの點が、今日林則徐を偉大なる愛國者あるいは民族的抵抗の英雄と讃えさせる所以とも思われる。このような愛國と抵抗の格調は、いかにも林則徐獨特のもので、當時の上奏文にもあまり類例がないほど際立っており、かえって幕末の志士吉田松陰や高杉晋作らに共通するような心情をわれわれに感得させる。

ところで、林の卓越した愛國の至情と決意に支えられた對英抵抗の具體策はどのようなものであり、またそれは、戦局の推移と現状に對するどのような認識によるものであったのだろうか。

右の片に提示されている抵抗政策の第一の要諦は、

このたびは、イギリスと海上で交戦するまでもなく、ただ國土防衛線を固守するだけで、彼らを何らなすところもなく困難の地に陥らせることができます。

という點にある。これは、林が、道光二十年三月初七日（一八四〇・四・八）到京の「燒燬匪船以斷接濟摺」^④のなかで、「なお守を以て戦となし、逸を以て勞を待てば、百に一失もなく、これにまさる策はございません。」と述べているのに照應されよう。いわゆる「守戦」であり、しかもそれは、「逸を以て勞を待つ」ことと不可分に結びついているから、まさに「持久戦」というにふさわしいものである。

林が右の片で、守戦の絶對性を強調したのは、つぎのような現状認識によるものであった。すなわち、「現に聞く」として、

(1) 彼ら（イギリス軍）が、給料支拂い、食費、船の賃借・兵士の雇用のための毎日數百萬金の出費、大砲・火藥の保有などの點で、「窮迫の有様は、すでにほぼ見えている。」

(2) 彼らは、浙江の寒冷な氣候にたえきれまいし、すでに定海の陰濕な氣のため非常に多數の死者が出ている（廣東着の夷信による）ことなどから、北風がきびしくなれば、おのずと「舟山を捨て去り、南に逃れ出るであらう。」

(3) 六月（一八四〇・七）以來イギリスの貿易妨害に對して廣東在住の各國商人の憤懣はおさまらず、「いづれも自國から軍艦を派遣してイギリスと黒白をつけようとしている。」

と分析するのである。これらの分析は、(1)(2)に關しては、かなり客觀的妥當性があつたといわなければならない。舟山占領のイギリス軍が、糧食の不足と土地の不健康と中國人の敵對行爲とに悩まされていたことは、イギリス側の記事に照し

でもたしかであり、とくに軍隊中に流行した大疫病（下痢・瘧疾・發熱症＝マラリア）は、「三・四百人がすでに埋葬され、およそ千五百人が入院した。英勇な（スコットランド）カメロン隊は、全く骨と皮ばかりになり果て、勇敢な第四十七團はほとんど健康状態にはなかった」と描出されるほどの惨状を呈し、イギリス軍の活動力を減退させていたという。たしかに、彼らにとって「舟山の氣候は一番恐ろしい」ものであった。一方、住民は、「われわれ（イギリス軍）と手を握ることは全く不可能である」といわれるほど敵對的であり、そのすべての原因が、「遺憾ながら、彼ら（中國人）があまりにも多くの場合にわれわれの側からの大きな不法行爲をうけてきた」と當のイギリス側が自認するように、イギリス軍のあらゆる非道な侵略行爲にあったことは明白である。これらの舟山における諸條件と經驗とが、イギリスの當初の期待に反した後來の舟山放棄につながっていたと思われ、この點林の豫見は見事の中していることになる。(3)の分析は、いうまでもなく「夷を以て夷を攻める」という戰略の現實的適用であり、これもまた林の戰略方針の重要な一環をなすものであった。それは、中國の傳統的外交原則にそくした方式であったともいえるし、換言すれば國際間の矛盾を利用するというところにほかならないのであるが、果してこの局面で林が強調するほどその矛盾が激化していたかどうかは、必ずしも確證できないから疑問とせざるをえない。もっとも、當時マカオに寄留するデント（J. Dent）など若干のイギリス商人が、長期にわたる貿易停止状態にいたく焦慮して、貿易再開への早急な措置をイギリス全權使節のジョージ・エリオット（George Elliot）に強く訴え出るといふことはあったが。

こうして見てくると、(3)に關する疑問を描くとすれば、林の現状認識は客觀的妥當性において高く評價されるべきものであると考えられる。そして、以上のような林の現状認識は(3)をも含めて、中國の對英抵抗が、まさに「逸を以て勞を待つ」という彼の言葉通りの局面に立ちいたっており、したがって、「このように逆夷（イギリス軍）は、現在進退ともにきわまるという状況にありますから、どうして内心おじけづかずにおられましょいか。」との確信につながったのである。

林の抵抗政策の第一の要諦としての「守戦」が、このような現状認識と確信に立っていたとしたら、その守戦の具體的

内容はどのようなものであつたのだろうか。この點について、林は右の片のなかではとくに言及しておらず、ただ防衛線の固守というだけに止まっている。しかし、彼はすでに同年八月二十三日（九・一八）到京の「密探定海夷情片」^⑧において、さきの現状分析とほぼ共通する見解を述べるとともに、「これはまさに乗ずべき機會」であると強調し、「海上で戦を交えれば、必ずしも見込みがあるとは限りません。それよりも陸地に誘つて擒にすれば、逆夷はもはや何もできなくなるでしょう。これにまさるものはございません。」と進言している。すなわち、彼は海上交戦を回避して陸地捕捉戦を主張するのである。海上交戦の回避は、そのまま守戦に通ずることになるが、それは林がイギリス艦隊の「礮利船堅」を知悉しており、その制壓下の定海において中國の水師が海上交戦を試みることは不利であると考えたからであらう。しかし、その認識は、必ずしも守戦の消極性を意味するものではなく、むしろ陸地捕捉戦に對する確信という積極性に支えられていたと思われる。彼は、その遂行について、「兵勇を郷民に變裝させたり、郷民を訓練して壯勇に仕立て上げたりして、續々と定海に歸つて來させ、（許つて）自分たちは（歸つて來るやうにというイギリス側の）招きに應じて戻つて來たのだが、これからはずっとイギリス側と一緒に居たい、というふうに見せかけるようにします。ひとたび多人數が集つたあかつきには、日時を約して（敵に向つて）行動を開始するのです。」と詳細な具體策を提案し、「（そうすれば）彼らを殺すのは、まさに鶏や犬を殺すようなものです。」と確言するのである。この提案は、民衆を組織し訓練して對敵蜂起を行なうゲリラ活動にはかならない。より簡単に言えば、民衆に依據するゲリラ戦術であつて、ここに提案の重要な意義があることを指摘しておかなければならない。もっとも、そのゲリラ活動が、「鶏や犬を殺す」ようにたやすく連ぶかどうか、些か誇張に過ぎた表現とも思われよう。^⑨しかし、提案要旨の客觀的妥當性について、胡思庸は、イギリス軍の陸兵の總數約四千、うち定海上陸數約三千、しかも彼らが前述のような窮境に陥っており、「よく作戦にたえうる者は寥々としてほとんどない」というこの時期に、「もしよく人民を決起させ、間斷なくこの少數の強盜に襲撃を加えることができたならば、必ずや彼ら全軍を覆滅にいたらせることができた」と肯定的見解をとつており、その場合、「人民を決起させる」ことにとく

に力點をおいていることが注目されるのであって、右の林の提案の本質と對照してすこぶる示唆的である。

このように見てくると、林則徐の「守戰」という戰略方針は、防衛線の固守というだけに止まらず、民衆に依據するゲリラ活動を重視し、「逸を以て勞を待つ」ところの持久戰であつたといふことができる。しかもそれは、「民人は（イギリス側が）しばしば招きよせているのに行きませんし、イギリス側が出した告示の條文も決して信用しようとはいいたしません。沿海の漁船はことごとくみな避去しております。」と述べているように、定海住民の強い對英敵視を正しく受けとめており、この對敵感情と行動を對英抵抗運動として組織することに重點がおかれていたのである。したがって、林の「守戰」における民衆依據の方法論は、イギリスの侵略に對する中國民衆の敵愾心を積極的に評價しかつ對應するという認識によつて可能となるものであつた。

林則徐の對英抵抗を特徴づける重要な認識の一つが、民衆に依據するという點にあつた、との指摘は、もはや周知の事柄に屬しており、改めて強調するまでもなからう。問題は、その認識の思想的特質と歴史的背景をより深く追究することにある。この問題は後でふれることにして、いまだし林の守戰の内容と役割について検討してみたい。

二 水勇の重視

林則徐の廣東在任末期における「守戰」の主張は、右のように、守戰とはすなわち持久戰であり、防衛の強化、民衆に依據するゲリラ活動を包括するものであつた。とすれば、このような守戰の内容は、イギリス艦隊來寇の以前も以後も、というより廣東着任の當初から離任にいたるまで、一貫して變らなかつたといわなければならぬ。林は廣東着任早々に（道光十九年正月一八三九・三）、越華書院監院の梁廷枏を訪ねて海防對策を諮問している。それは、アヘン貿易禁絶の完全遂行とそれに伴う將來の紛糾の事態に備えようとする積極的姿勢の現われであつたと思われる。ついで彼は、「洪濤巨浪の中では（アヘン艦船の驅逐に）必ずしも確かな成算をもちえない」中國水師の劣勢の現實を十分認識した上で、

「嚴密防守」の態勢をととのえ「夷船を取締り查拏する」措置によって、二萬箱以上のアヘンの沒收に成功した（道光十九年二月三月一八三九・三〇四）のち、廣東防衛の強化に大きな努力を傾注した。これについて、『道光洋艘征撫記』に、

林則徐は昨年（道光十九年一八三九）から廣東に來て、毎日人に命じて西洋事情の調査、洋書の翻譯、また西洋新聞の購入に當らせ、西洋人が（中國の）水師を非常に輕視する一方、沿海の梟徒や漁民・蛋民をおそれていることをつぶさに知った。そこで壯丁五千を招募し、各人に月給六圓、家族手當六圓を與え、その費用は洋商、鹽商、および潮州の客商に分擔醸出させた。また虎門水道の橫檔島に鐵練（鐵鍊）や木筏を敷設し、中流を橫斷するようにした。西洋各國の大砲二百餘門を買い入れて兩岸に増設した。また同安の米艇、紅單船、拖風船を雇い入れて戰船六十を準備した。また火舟（大舟の誤りか？）二十、小舟百餘を用意して攻撃に充てた。それとともに、もと（外國人の所有であった）洋船を買い入れ、これをひな形として、兵士に船首や船尾を攻撃し中鎗に躍進する方法を演習させた。つとめて暗夜の潮流や風上を利用するようにして必勝萬全の計とした。林則徐はみずから獅子洋に赴いて水師を檢閲したが、號令は嚴明で士氣甚だ壯んであった。

と簡明に記述されているのは注目に値する。もっとも、この記述には若干の錯誤があり、とくに、「西洋各國の大砲二百餘門を買い入れ」とあるのは、林の原奏によれば、「現在該處（虎門）各砲臺は、大砲三百餘門を數える」^④となるのであって、西洋各國から購入した大砲の數は明言されておらず、三百餘門というのも各砲臺を含めた現有數を指している。しかし、この記述が、林則徐の廣東防衛強化の内容を、(a) 西洋事情の調査を積極的に進めたこと、(b) 沿岸のアウトロー的な分子を招集して壯勇とし、彼らに支給する生活費・家族手當を、洋商、鹽商、潮州客商に分擔させたこと、(c) 虎門水道に鐵鍊・木筏を敷設し、西洋の大砲を購入したこと、(d) 大小の船舶百八十以上をととのえ、奇襲攻撃の訓練を行なったこと、(e) 水師の統制を嚴明にし、士氣を大いに高めたこと、などの諸點に要約しているのは當を得ているように思われる。もちろん、これらの諸點は相互に結びついているから、關連的に考察することが必要である。

(a)の點は、當時の清朝官僚一般の陋固たる中華主義、の枠組みを突破した林則徐の卓越した思想的進歩性を示すものとして、すでに多くの論者の強調するところとなっている。それはまさにその通りなのであるが、ここでは、(b)と関連して、その思想的進歩性が逆にみずからの中國の民衆のすぐれた力量を改めて確認することによって、彼らを對英戦力として組織する、という役割を果していることに注目すべきであろう。換言すれば、新たな西洋認識を通じて發現された林の思想的進歩性は、これまでの中華主義の枠組みを超えた中國認識となり、それが彼の廣東防衛の強化さらには對英抵抗の思想的基盤となっているのである。

また(b)は、既述の民衆依據の内容と特質にかかわる重要な問題であるが、この問題は一應措くとして、林は廣東の防衛を強化するにあたって、水勇の招募・訓練・奇襲活動に格別の情熱と努力を示しており、それは水師の場合と比較して對照的と考えられるほどである。このことは、林が前出の「燒燬匪船以斷接濟摺」のなかで、

現在スミス、ウォーレンの兩船 (Volage 號と Hyacinth 號とを指す) が退去しないしておりますが、彼らがあくまで逆らおうとする氣持を推測しますと、みだりに礮利船堅を誇り、またそれをどのイギリス船も護符のように頼みとして、わが水師による驅逐を阻止できると思っているからです。私どもは、もし師船の隊列をととのえて出動し、遠く外洋に赴いて力をあわせてきびしく追ひ拂うようにいたさせますと、勝算に結びつけられないわけではありません。ただ外海は洪濤巨浪で風信常ない (風の時期や方向がいつ變るか知れない) 状態ですから、たとい夷船をことごとく撃沈いたしましてもそれはごく當然のことにしかすぎません。それにしても師船はすでに遠くまで出動しているのですから、直ちにまとめて引き返すわけにはまいりませんし、假りに少しでも手ぬかりがありましたら、何の値打ちもないことになりましょう。なお依然として守を以て戦となし、逸を以て勞を待てば、百に一つの失敗もなく、これにまさるものはありません。…… (中略) ……そこで私は關天培提督とひそかに相談いたしました、かねて裝備しておきました大小の火船を用い、漁戸、蛋戸をそれぞれ雇い入れて彼らにその操縱法と發火法を教え、每船の指揮をとるのは一・二

の兵士だけで、残りみなこれらの民人を雇用して水勇とするわけです。彼らは先に各入江に赴いて、分れて部署につき、身體をかくし伏せ、深夜になって各（匪）船がともに熟睡状態になってしまふまで待ち、風も潮も（わが方に）順調なのを充分に見きわめ、そこで一齊に出動を開始し、勢に乗じて火攻をかけ、イギリス船にまといついている各匪船をつぎつぎに焼いたり捕えたりいたさせまして、一船を焼いた者には賞として一船を與え、もしイギリス軍艦まで延焼できた者には、重賞倍加をゆるします。これが私の計畫している處置方法でございます。

と詳述していることから察知されるのである。この記述は、イギリス艦船の接濟（生活物資の補給やアヘンの入手）に暗躍する中國「匪船」の驅逐策を論じたものであるが、前半の水師に關しては、イギリス軍艦の「礮利船堅」、あるいは外洋の「洪濤巨浪」「風信靡常」などの客觀的諸條件をプラス・マイナス兩様の口實として中國水師の劣勢を巧みに糊塗しながら外洋への出動を回避しようとする態度をおおいかくしえないだろう。このことは、反面、守戦を正當化し、守戦をもって廣東防衛に對英抵抗の基本戰略とすることを意味しているが、この前提に立つて、守戦の主體的擔い手としての水勇の積極的役割に大きな比重をおいていることが理解されるのである。林則徐は、「漁戸蛋戸」などの「民人」を雇用して編成した水勇を主力とし、水師と協力して行なう火攻に非常な意欲を示し期待をかけている。したがって、火攻は、民衆に依據するゲリラ活動という點で、既述の定海の場合と全く共通しており、その主要内容の一つとなるべきものであったといえる。火攻の戰術は、おおよそつぎのような方式であった。^①すなわち、水勇は數隊に分れてふつう四十人が一隊となり、水師の指揮官に率いられ、イギリス艦船の停泊する入江や島の適宜な部署に身を伏せて深夜を待つ。引き潮と追い風を見計って、あらかじめ裝備をととのえてあった大小の火船を一齊に出動させる。各船には噴筒・火礮・火箭もしくは柴草などが満載され、敵艦船ないしその周圍に群がる中國匪船に接近し、發火攻撃を開始する。風に乗じて携帶した火器類を抛擲し、敵艦船を焼き拂うか延焼させ、もしくは敵艦船に亂入して桅帆に噴筒などを仕掛けるか舷側に油と柴草を装填した小舟を釘附けて火を放つ。この混亂に乗じて水師の白兵戦が敢行される場合もある。火攻を終えたら上げ潮に

乗って歸還する。』というのである。このような火攻は、「その不意に出て一齊に發火する」とか、「その不意に出て火船が亂入し來撃する」とかいうように、奇襲を旨とした海上ゲリラであつて、攻撃には、竹筒の中に火藥・玻璃・碎石片などを装填した噴筒、可燃物をつめた火罐、火箭、油をかけた柴草など、いわば原始的な火器材料が用いられ、また中國史の先例にならつた火攻法が採用されており、イギリスの近代兵器ときわめて對照的であつた。

それでは、火攻の効果はどうであつたろうか。火攻について林則徐のはじめの期待は、「夷船の中は、觸れるところみな火のつきやすいものばかりで、焼け爛れないではすまないのです。これ（火攻）がひとたび實行されることになれば、じつにその事（火攻）を待たずとも、奸夷は、はじめから恐怖します。彼らを威壓屈服させる一方法かと存じます。」というところにあつた。火攻戦術が實際に展開されるのは、穿鼻海戰（道光十九年九月二十八日—一八三九・一一・三）以後であり、當面その主たる對象は虎門の外洋に留泊するイギリス軍艦ヴォーレージ・ヒアシンズ兩號およびその保護下の商船約五・六十隻、さらにこれらにひそかに接濟する中國匪船などであつたが、イギリス艦隊の來寇以後情勢の緊迫化にともない、(d)の指摘に見られるように火攻戦力は一そう増強され、作戰も活潑かつ多面的になつてきた。このような狀況のもとで數次にわたる火攻が行なわれたが、その戦果のうち林則徐の上奏にかかる主要な例には、道光二十年正月二十七日（一八四〇・二・二九）長沙灣附近での「中國匪船二十三隻を燒去、イギリスのボート一隻を前後延燒、舟小屋六座を燒燬、燒死・溺死を除いて匪犯十名を生擒」、同五月初九日（六・八）磨刀外洋における「イギリス船二隻を燒燬、同一隻を桅帆著火、イギリス兵四名を殺斃、大小匪艇十一艘を延燒、舟小屋九座を燒燬、匪犯十三名を擒獲」などがあつた。これらの戦果にそくして、林は、「このたび夷船が外洋に逗留しているのを調査しましたところ、常にわが火船がひそかに出動焚燒することを防いでおります。彼らの様子には實に驚きとおそれがあらわれております。」「ただ漢奸（イギリス軍と通じている中國の奸民）の心をおそれさせるに十分なだけでなく、また夷夷の心膽を寒からしめるであります。」「夷船は最も焚燒をおそれておりますので、やはり彼らがおそれているものを利用し、手段を講じて彼らを制するわけです。」と

述べ、對英抵抗における火攻の戰術的價值を大いに力説した。また、あわせて水勇の力戦ぶりにも言及している。一方、火攻に對する外國人の評價は、正月二十七日の場合は、一八四〇年三月七日の『澳門新聞紙』に、「中國人がもし各火船の攻撃を上手に仕かけてきたら、イギリスの各船は必ず大損害をうけるだろう。これは第一回目のことといえようが、今後おそらく中國人がいったん熟練するならば必ずや火船を進めてくるであろう。そうしなければますますって危険なことになる。ただわれわれは、ひたすら油斷なくこれを防ぎ止めなければならない。」とあるが、對照的に五月初九日の場合は、『中國叢報』(Chinese Repository)に、「ほとんどもしくは全然損害を受けていない。」とされている。奇襲攻撃が中國匪船にかなりな打撃を與えたことは確かとみてよい。しかし、イギリスの艦船に對しては、心理的にある程度の功を奏したであろうが、損傷は輕微にとどまり、重大な打撃にまではいたりえなかった、というのが妥當であろう。しかし、火攻の效力如何の問題よりも、外國人の側に火攻に對する恐怖さらに「沿岸の梟徒および漁船蛋戶」への畏れが事實として存在したならば、その事實は外國事情の調査を進めていた林にとって、水勇による火攻戰術への自信を強める契機となったであろう、と考える方により意義があるように思われる。林の場合、「礮利船堅を恃む」イギリス側の弱點は、どのようなものであれ、逆に中國の對英抵抗を精神的に鼓舞するプラスの要因として利用され、民衆に依據するゲリラ戰術の發展に資せられているのである。

ところで、林則徐の對英抵抗政策における水勇重視の認識は、彼の革職以後もいささかも變わってはいない。彼は、「和議がまだ成立せずに、沙門・虎門が相ついで陥落したとき、やむをえずなお自分で水勇千人を雇い入れ、一つの別動隊をつくった。」と述べているが、これは、道光二十一年二月初旬(一八四一・二下旬)イギリス軍が琦善の確定條約締結不履行を口實として再度の武力行使を開始したとき、直ちに「福潮會館に向いて、泉州・漳州の郷勇を募ることを議し」、三日後に「壯勇の徵募を督促して五六百人を得た」ことと關連があるように思われる。さらに、この水勇徵募の直後にも、對英進討の諭旨をうけて廣東に來任した楊芳に、「火船水勇を整理挑用」する策を進言し、そのなかで、とくに廣東

の潮州、福建の漳州・泉州から雇用した火船と水勇の力量を大いに賞揚している。そして、このような水勇のすぐれた力量に對する林の期待は、彼が伊犁流涕の途次には、中國の對英抵抗の攻撃戰術上殘された唯一の頼みの綱、とされるほどの信頼にまで高められていたのである。このような期待と信頼の基底には、きわめて顯著に彼の民力依存の思想が投影されている。

林則徐が水勇を雇用し對英戦力として編成する場合、民力依存の思想とともに、魏源の指摘する「各人に月給六圓、家族手當六圓を與え、その費用は洋商、鹽商、および潮州の客商に分擔釀出させた」という點は重要であろう。これについては、林も、對英攻撃に赴く彼らを「巨資をもつて募る」、「高い給金を與える」と述べているように、彼らの力量と活躍に報いるための手厚い措置を講ずることを雇用に際しての當然の前提條件としていた。しかし、水勇は民間の義勇兵であるから、その雇用はあくまで國家財政の枠外にあった。この原則は、アヘン戦争という國家・民族の危機の時期においても變わることはなかったのである。したがって、水勇のあらゆる經費は、當該官僚の機宜の裁量に委ねられており、その大部分が慣習的に洋商、鹽商といった特權的な大商人の捐輸に依存していた。林も水勇を強化するにあたって、同様な方法によらざるをえなかったのであるが、彼が洋商、鹽商など特權商人のほかに、潮州の客商にも費用を分擔させている事實には注目しておく必要がある。この點は、林が福潮會館に向いて水勇の徵募を督促したこと、さらに彼が最大の信頼をおいた火船・水勇が潮州（廣東省）および漳州・泉州（福建省）に由來していることと、密接に關連しているのではないかと推測される。福潮會館は、福建省および廣東省潮州府出身の商人たちを主體として構成され、この兩者は地域的にも言語の上でも共通の紐帶で結ばれていたと考えられる。したがって、同じ福建省出身の林との結びつきの強いのは當然であろうが、彼らの客商としての性格と力量がどのようなものであったか、は今後の考察に俟たなければならない。

林則徐が水勇を對英抵抗の主體的擔い手として重視していたとすれば、對照的に、彼の水師への對應はどのようなものであったのだろうか。彼が廣東着任早々、それまで兩廣總督鄧廷楨の管轄下でアヘン密輸と結託し常習的な腐敗状態におちい

ていた廣東水師、の肅正を斷行し、信賞必罰を嚴明にして士氣の刷新に努めたことは、周知のとおりである。加うるに、彼は、提督關天培と緊密に協力して、後述する砲臺・排練の強化と關連させながら水師の編成・配置に綿密な改變・整備を加えるとともに、みずから率先して對敵攻撃、水勇との共働作戰の訓練を督勵した。その結果、水師の士氣と戦力が著しく向上し、やがて林をして「大洋に出て力をあわせて（敵を）剿辦させる」、「隊列を整えて出洋し、敵を追跡し迎撃する」ことを期待させるまでにいたっていた。それにもかかわらず、このような過程において、彼は、イギリス艦隊に對しなお中國水師が劣勢であることを十分に認識していた。すなわち、道光十九年十一月初八日（二一・一三）到京の彼の「會奏穿鼻尖沙嘴疊次轟擊夷船情形摺」^⑧には、九月二十八日（二一・一三）の穿鼻海戰の誇大な戰果報告にもかかわらず、中國師船の弱體が「師船は木材が堅固でないので、（イギリス軍艦を）追いつめたり遠くまで追いかけるのに、なかなかうまく行きません。」と指摘され、イギリス軍艦の「損傷をうけても、ただ甲板だけのことで、艦側・艦底は丸木の外國產木材で出来ており、さらに全體を銅で包んでありますので、砲撃しても容易に貫通できません」という堅牢さと對比されていることに、よく示唆されているのである。中國師船の戰鬪能力は、搭載している「三千斤の銅砲は最も威力があるといわれる」のが限度で、それではイギリス軍艦の威力には到底抵抗できなかった。この時點で水師が相手としていたのは、備砲二十八門のヴォーレジ號と二十門のヒアシンス號であったが、のちに來寇したイギリス艦隊中最大のものは、「百餘位」、「およそ七・八千斤の重さ」の大砲を備えている、と琦善を驚嘆させたほどであるから、中・英の艦・砲の差異には歴然たるものがあつた。翌年五月十一日（二八四〇・六・一〇）到京の林の上奏には、「海上水師の備砲は、必ず三・四千斤以上、製造もまたきわめて精巧なものでなければなりません。」と力説されている。

それにもかかわらず、イギリス艦隊來寇の前後を通じて、水師における船・砲の強化にはあまり進歩のあとが見られない。船・砲の強化に巨額の經費を必要とするのは當然であるが、問題は、じつに、林が大砲の強化に言及する毎に、「この砲臺建設の工事は防夷の要務なのでございます。斷じて緩めることはできません。」と力言しながらも、續けて「しか

し國家の經費にはきまりがあります。どうして勝手にみだりがましい御願いをいたしましょうか、あるいは、「國家の經費にはきまりがあります。なおあえて財政上の支出を御願いするようなことはいたしません。」といわざるをえなかったその點にある。換言すれば、清朝の中央政府は、水師ないしは船・砲の強化について、財政上何らの責任ある對應策を講じようとはしなかった。定額以上の經費は、水勇の場合と全く同様に、すべて當該官僚の裁量の責任に委ねられていたのである。ここに、林則徐の對英抵抗を阻む重大な障害の一つがあった。したがって、廣東における水師・船・砲の強化に要する經費は、ほとんど「洋商捐銀」に依存していたのである。

三 廣東防衛における砲・船・水師

國家財政上の制約が對英抵抗の大きな阻止的要因となっていたことを考慮に入れながら、前節に引續いて、廣東防衛の強化における(c)の點に考察を移そう。

まず、虎門の橫檔山の前方海面に鐵鍊・木筏を設けたことについては、道光十九年四月二十九日(六・一〇)到京の林則徐の「覆奏查察虎門排鍊礮臺摺」と同六月二十七日(八・六)到京の鄧廷楨らの上奏に詳述されている。それらによれば、橫檔海面の西北から東南にかけて、兩道(三條)の木排(一筏)と鐵鍊を敷設し、同四月二十七日(六・八)に完竣されたことになる。第一道は、大排三十六排と大鍊三百九丈餘、第二道は、大排四十四排と大鍊三百七十二丈という規模であった。木排・鐵鍊による海口の防備は、守戦という林の戰略方針の重要な一環をなすものであったが、もともと彼の創始にかかるわけではなく、彼の着任以前に兩廣總督鄧廷楨が水師提督關天培と相計って、砲臺の添設とともに、道光十八年十月から十九年三月にかけ、洋商伍紹榮らの捐銀十萬兩により急ぎ完竣したものである。

つぎに、砲臺の添設であるが、鄧廷楨は、木排・鐵鍊の創設と並行して橫檔島に大砲臺一座を添設し大砲六十位(門)を据えおいた。この大砲は、道光十五年鎮遠・橫檔・大虎の各砲臺に添鑄されたものが七・八千斤であったから、それと

ほぼ同等のものであったと思われる。木排・鐵鍊の敷設と砲臺の添設は、一八三四年九月（兩廣總督盧坤の任内）のネーピア（William John Lord Napier）によるイギリス軍艦二隻の虎門侵入事件、および一八三八年七月八月（兩廣總督鄧廷楨の任内）のメイトランド（Sir Frederick Maitland）によるイギリス軍艦三隻の來粵投書事件、を契機とする防衛措置であり、木排・鐵鍊によって外國軍艦の虎門水道侵入を防害しその行動の自由を失なわせ、それに乘じて各砲臺の大砲が連續轟撃を加えるというように、兩者が相互に連動して夷船を「灰燼」に歸せしめることを企圖していた。このような鄧の施策は、ほとんどすべてが水師提督關天培の提案に出たものと考えられる。林則徐は、皇帝から鄧らの施策の實態と效用について査察を命ぜられたとき、覆奏においてそれが「海防上實に有益といえる」と全面的に支持し、さらに關天培が排鍊・砲臺の施策に全力を傾けみずから率先して事に當ったことを稱揚し、今後關の定めた運用方式にそくすべきであると述べている。したがって、林の海防措置は、基本的には關のそれを繼承したものともいえる。

しかし、積極的に西洋事情を調査し、またイギリス軍の「礮利船堅」に直面していた林則徐にとっては、彼らの恃みとする近代兵器にいかに対處すべきかということが、對英抵抗のための廣東防衛強化上の急務とならざるをえなかった。彼は、道光二十年五月十一日（前出）到京の上奏において、「ただ大砲の型式という一事につきましても、海上の師船用としては、どうしても三・四千斤以上で製造もまた最も精巧なものでなければなりません。これですと、イギリス側の大砲に對抗するにはじめて役立つことができません。砲臺に据えつける大砲となりますと、やはり七・八千斤から一萬斤以上でなければならぬということになります。それならば遠方までとどくことができます。」と言い、また同七月初四日（八・一）到京の「嘆夷續來兵船情形片」では、「あらゆる虎門各砲臺は、これまですでに添設増修をほどこし、海面に敷設した兩層の排鍊とたがいに表裏して機能するはずになっております。それでもおそらく各砲臺にとりつけてある舊型の大砲は、必ずしもすべてが役に立つとは限りませんので、また手段を講じてひそかに西洋の銅の大砲とイギリス以外の國で精製した鐵の大砲で五千斤から八・九千斤ぐらいまでのものを買入れました。できるだけ遠攻に役立たせようとし

ております。」と述べている。これらの上奏から、林の廣東防衛強化の最大の眼目が大砲にあったことを改めて確認できるのである。ただ、廣東防衛強化のため、砲臺に既設の舊式よりもすぐれた洋式の大砲を増設することに大いに力點が置かれている反面、師船の場合は、「礮利」の面が力説されているのに「船堅」についてはあまりふれられていない。道光二十年七月十九日（八・一六）到京の鄧廷楨の上奏^⑧によれば、師船の最大のものでも「みなイギリス軍艦の十分の五にも及ばない」し、「船の大きなものでも備砲八門にすぎず、（大砲の）重さは二千餘斤にすぎない」から「船砲の力は實に相敵しがたい」のであった。この事實に照らしてみると、林において、「船堅」の實現は「礮利」よりもさらに困難な問題であつたろうと推測される。

しかし、彼がかねて「船堅」の問題と取組んでいたことは、既述の楊芳への進言^⑨のなかで、「外海の戦船」について、「別に堅厚な戦船をつくって、制勝に役立てなければならぬ」とし、「昨年（一八四〇）様式を商定したこともあったが、やがて局面が變つたために、まだ製造するまでにいたらなかった。その戦船のひな形は今でも虎門寨にある。もし早速取つてきて参考にし、製造を急いで各方面から材料を買い入れ、職工を多數あつめれば、およそ四箇月以内に二十隻は完成できる。その後引き續いて造成し、全部で百隻をもてれば、はじめて使用に十分となりうる。これは海疆長久の計であつて、すぐにも計畫し實行すべきだと思ふ。」と述べていることによつても明らかであろう。彼は、イギリス側の「船堅」に對抗するために、みづから「堅厚な戦船」の構圖とその具體化を準備していたのである。魏源によれば、林は廣東離去のときに、戦船の圖式八種類を携えていたが、そのうちの一種はじつに車輪船圖であつた、という^⑩。しかも、林は、浙江に赴いてからも造船問題について、すでに水輪船の建造を進めていた浙江縣丞龔振麟らと共同して討議を重ねていたのであつた。

彼の「船堅」に對する關心は、すでに一八四〇年一月の初めごろ（道光十九年十一月末〜十二月初）、アメリカ人から舊ケンブリッジ（Cambridge）號を購入したことに示されている。ケンブリッジ號は、千六十トンアメリカ商船である

が、船長ダグラス (Joseph Abraham Douglas) は廣東のイギリス人の苦境に目をつけ、補助艦として裝備し、一八三九年六月七日マカオに到着して、イギリス船の保護を申し出で、エリオットの雇用をうけて二箇月半近くの間イギリス商船隊保護の任務に従事した。その後、備砲を取りはずしイギリス當局に賣却されたが、さらに一萬七百ポンドでアメリカのデラノ (Delano) 商社の手に渡り、チェサピーク (Chesapeake) 號と改名された。^⑧『道光洋艘征撫記』には、林がこれをモデルとしてイギリス艦船攻撃法を演習させた、とあるが、それだけではなく、烏涌堡壘陷落 (一八四一・二・二七) 道光二十二年二月七日) 直後、イギリスの武裝汽船ネメシス (Nemesis) 號のホール船長 (Captain Hall) が、「ケンブリッジ號は全部で三十四門のイギリス製の大砲を搭載しており、中國側がいかによく交戦の準備をしていたかを知って驚いた。大砲は申し分ないほど整然としており、消火用バケツが甲板のあちこちに配置され、きれいによく整頓されていた。」と述べたように、林はこれを「中國海軍における最初の外國製軍艦」に仕立てて、海上交戦にそなえていたのである。さらに、當時從軍中のイギリス士官ビンガム (John Elliot Bingham) によれば、^⑨林はケンブリッジ號以外にも、二隻の二十五トンのスクーナー船と一隻の小外輪船を購入していた、という。したがって、「幾人かの西洋人の見るところでは、林は侵略者を驅逐するために新しい海軍を計畫していた。」との指摘は、必ずしも過言ではないと思われる。

ただ、林が對英抵抗のための「礮利船堅」を企圖するにあたって、やはり大きな障害はあくまで經費の問題であった。さきの五月十一日 (六・一〇) 到京の上奏のなかで、彼は、「經費を調達することが、實に第一の要務でございます」と述べ、さらに、現状では洋商の捐輸が度重なっていることを考慮して、ついに輸出茶を對象とした「行用銀」を充當するにいたったことを明らかにしている。このようにして、林の廣東防衛強化施策は、國家財政の制約から、水勇・大砲・戰船にわたる多額の經費のほとんどすべてを、洋商に依存しなければならなかったのである。しかし、洋商の捐輸に限度があるとすれば、林の積極的な對英抵抗政策は、當然國家財政との深刻な矛盾關係に逢着せざるをえなかった。それにしても、林の場合は、清朝唯一の外國貿易港をもつ廣東において、洋商＝廣東十三行という特權的大商人を主とし、さらに鹽

商、潮州の客商などに依據することもできたが、沿海各省について、同様な抵抗主體と經濟的背景を期待することはほとんど不可能であつたと思われる。

ところで、さきの『道光洋艘征撫記』の要約に戻るとして、(d)・(e)についてはあわせて述べる方がいいようである。これらは、いずれも道光二十年八月二十三日(九・一八) 到京の「倭逆兵船續籌剿堵摺」(前出)に照應すべきものであるが、この上奏は、廣東外洋のイギリス軍艦六隻、同商船二十餘隻の寇掠に對抗しようとする積極的姿勢を反映しており、これを通じて、林による廣東防衛態勢のいわば最高潮の状況を理解することができる。

林は、水師各營から大號米艇二十隻を召集し、紅單船二十隻、拖風船二十六隻を雇い入れ、兵士を選抜配置するほか水勇千餘名を募集選抜し、大砲・火藥および器械類を配備して、日々訓練にはげませ、攻戰準備をととのえた。このほか大船二十餘隻を買い備えている。こうして彼は、「もし(彼らの)技藝がひとしく精熟すれば、日を擇び隊を整え全力をあげて海上に出動させ、力をあわせて敵を剿滅する」という作戰企圖に言及する一方、マカオの關閘地方に、兵勇千餘名に加えて官兵二千名を増強し巡防に當らせたのである。彼によれば、「沿海陸路で先後派遣して防備に當らせた兵勇はすでに八千名に及び、配置はいずれも連絡十分である。」^⑧という。

ここで、注目すべきは、彼が、「もし技藝がひとしく精熟すれば……全力をあげて海上に出動させ……」^⑨といい、また、同九月十八日(一〇・一三) 到京の「關閘地方礮石洋面疊將逆夷擊退摺」^⑩に、「各船の兵勇を激勵奮起させ、隊を整えて海上に出動し、敵を追跡迎撃する」と述べていることである。これらは明らかに、守戰から海上進攻への戰略的變化を示唆するものである。この變化は、すでに林への不信と激怒にかられていた皇帝によって、「これまでイギリス側と海上で交戦するに價しないと言っておりながら、どうして今度は海上に出動して剿滅したいというのか。前後矛盾するではないか」^⑪と手きびしい批判をうけている。これに對して、林は、「(イギリス艦隊が定海に來寇するまでは)イギリス側に狂暴な情形がなかつたので、海上で交戦せず、彼らが窮して歸國することが望ましいと奏請したのです。七月になって、彼らが定

海縣城を攻撃占領したことをはじめてきまして、もはや彼らの反逆の情は明白になったといえましょう。血氣のある者なら誰しも憤りにもえ仇を共にしなければなりません。この時に、私が追加雇用いたしました拖風・紅單などの船には大砲や彈藥やすべての兵器がただ今すでにととのっております。そして編成訓練いたしました水勇は、技藝もしいに前よりも熟達しております。水師の勢力を助けるに足ることと思います。」と辯明している。この辯明によれば、海上交戦は、中國の領土に對するイギリスの直接侵略を契機とした、全中國の結集による斷固たる抵抗の一環であり、しかもそれは、防衛力の強化の實績と自信によつてはじめて可能となるべきものであった。七月二十四日（八・二二）到京の「倭夷兵船移泊校椅沙情形片」^⑤と前出の「開闢地方礮石洋面疊將逆夷擊退摺」は、この關連を最も明確に反映している。したがつて、さきの、林に見られる守戰から海上交戦への戰略的變化は、決して定見のない戰略的轉換ではなく、皇帝の形式論理的な「矛盾」という批判は妥當ではなからう。林の對英抵抗のための「守戰」は、單に防衛の強化に限定されたものでではなく、海上交戦への戰略的發展を指向するものであった。

四 近代兵器の採用と皇帝批判

以上、林則徐による廣東防衛の強化の諸相について若干の考察を試みてきた。彼は、その成果を、「廣東では乗すべき隙はない」と自負するとともに、イギリス艦隊が廣東を越えて北上することを憂慮し、福建・浙江・江蘇・山東・直隸各省の海口の防禦を嚴重にすることを皇帝に上奏した^⑥。事態の推移は、彼の豫測通りに展開した。そこには、たしかに、林を「豫言の天才」といわせる所以がある。しかし、その結果は、イギリス艦隊の威力におびえた清廷の主和政策への轉換、そして清朝權力内部で彼と反對の立場にたつ、いわゆる投降派の代辯者と目される琦善の登場となったのである。

ここで、冒頭の「密陳夷務不能歇手片」に戻らなければならない。

この「片」の第二の要諦は、

アヘンの害たるや、洪水猛獸よりも甚だしいと知るならば、堯・舜が今日の世におられなくても、やはり驅除されずにはおられなかつたでしょう。聖人が法を發動して惡を懲らしめられますのは、じつに天下萬世のためをお考へになるからであり、天下萬世の人々もまたアヘンを禁ずる必要がないなど考える道理は斷じてございません。もしも、夷兵の來寇がアヘンの禁止によつて起つたといひますならば、かのアヘンを内地にもちこむ連中は、早くから人を害する心を抱いていたのであり、これを今あばくかそれとも他日にあばくか、その輕重は必ず辨別しなければなりません。

という點にある。すなわち、林は、堯・舜に託してアヘン禁絶の絶對的正當性を強調し、イギリスの非道性を告發して、これとの對決を促すのである。この論理に立つて、彼は、自身が果したアヘン沒收とアヘン廢棄の成功と誓書提出の要求の妥當性と成果に言及し、あくまで逆らおうとするイギリスへの貿易停止が、皇帝の命による措置であることを明らかにしつつ、以上のすべてを無視して定海を侵犯したイギリスに對しては、「ただ通商を許しがたいだけではなく、當然威をもつて反逆を屈服させるべきであります。」と要請する。そこには、彼の自己辯明と思われる面もあるが、アヘン禁絶と、イギリスの侵略への徹底的抵抗とについての、執拗なまでの訴えが貫ぬかれている。同時にまた、その訴えは、「夷兵の來寇はアヘンの禁止によつて起つた」とする言説への反論ともなっていることを指摘しなければならない。この説は、イギリス艦隊の來寇を林の抵抗政策の責任に歸せうとする動きのあることを示唆しており、當然そこに、林の抵抗政策を批判する主和派の擡頭を措定せざるをえないだろう。とすれば、主和派の立場は、林批判という點で、イギリス側の抗議を容認することになる。しかし、このような主和派の對英妥協は、やがて清朝のアヘン禁絶政策の放棄につながないだろうか。このような経過を必然と考えるならば、林の對英抵抗は完全に失敗に歸することになろう。しからば、主和派を對英妥協に驅りたてる決定的契機は何なのか。ここにおいて、林が、

ただ、おそらく、とやかく議論する人々は、中國の戰艦と大砲では、とても外夷に敵することはできないから、いつ

までもむだに時日を費すよりは、何とか統御の方法を講じた方がよい、と考えるでありましょう。

といわざるをえないことの意味が明らかとなる。すなわち、これは、對英妥協を企圖する主和派への痛烈な批判にほかならない。同時に、そこには、主和派の對英妥協の決定的契機が、イギリスの「礮利船堅」であることが指摘されよう。

しかし、だからといって、對英妥協は決して問題の究極的な解決につながるはずはない。林は、續けて、

そもそも夷の性はあくことを知りません。一つの地步をえれば、さらにもう一步を進めてくるでしょう。もし威力をもつて勝つことができないとすれば、おそろくわざわいのやむときはないでしょう。その上、他の國々もこれにならうことになりますから、このことはさらに深く思いをいたさなければなりません。

と述べる。ここには、よくいわれるように、イギリスの侵略の本質と役割に對する透徹した認識が反映されている。

しかし、主和派への批判は、「威力をもつて勝つ」ことの可能な方法如何の問題にかかわつてくるのである。さきの「片」の第三の眼目はここにおかれることになる。すなわち、それは、

そこで軍艦と大砲について申しますと、これは本來海防のために必要なものであり、すみやかにととのえることができなくても長久の計をたてて、あらかじめしっかりと計畫に取り組んでおかなければなりません。かつ、廣東の利は通商にありまして、道光元年（一八二〇）から今日までに、粵海關はすでに銀三千餘萬兩を徴收しております。通商の利を収める者は必ずその害を豫防しなければなりません。もしこれ以前に、關稅の十分の一をもつて大砲や軍艦をつくつておりましたら、夷を制するにも餘裕がもてたはずで、どうしてもてあますような事態にいたつたではありませんか。……（中略）……ただ廣東の關稅はこれまで他省にくらべて豊富ですから、夷と通商してえた銀を、夷を防禦する費用にあてるように取り計らいますなら、以後、大砲をつくるには必ずきわめて精巧なものを求め、軍艦をつくるには必ずきわめて堅固なものを求めるようにいたしても、その經費はまかなうことができ、益するところは決して少なくないように思われます。

という提言であり、その意義はきわめて重要である。

この提言の要旨は、筆者がかつて言及したように、^⑧(一)軍艦・大砲が海防のための不可欠な條件であること、(二)これらを製造するための経費は、廣東海關の豊かな稅收を充當すべきこと、の二點にある。(一)は、これまで考察したように、林が廣東防衛強化を進めるに當つての最大の課題であり、その目標は、イギリスの「礮利船堅」、すなわち近代兵器にはかならなかった。近代兵器の積極的採用は、形の上では、後來の洋務派による軍事工業への要求と共通するものである。しかしそれは、侵略への徹底的抵抗という志向において、明白に洋務派とは異なっている。

それはともかく、ここには、「礮利船堅」が對英抵抗上の不可欠の手段であるとする林則徐の決定的な認識が提示されている。そして、それは、對英抵抗の具體策を依然として舊い中華主義的な西洋認識の尺度でしか測りえなかった皇帝への提言として、劃期的ともいえるものであった。

(二)は、「礮利船堅」を實現するための經費問題についての論及であるが、さきに見てきたように、林則徐の對英抵抗を阻害する重大な要因がこの點にあつたとすれば、その解決策に彼の非常な關心が注がれたことは當然であろう。しかし、經費に關する彼のこの提案が、「一片の胡言のみ」という激怒の硃批によつて一蹴されざるをえなかったところには、彼の提案のもつ「革命的性格」^⑨の問題があつた。それは、「その(通商の)利を收める者は必ずその害を豫防しなければなりません。」「もしこれ以前に、關稅の十分の一をもつて大砲や軍艦をつくつておりましたら、……どうして(夷を)もてあますような事態にいたつたであらうか。」などの語が、皇帝に對する義務の強要、責任の追求と聞えても當然であるということのほかに、粵海關監督の地位が皇帝の特別選任によるものであり、海關稅收が北京宮廷への贈金に充てられていたことを考えれば、海關稅收の使途を云々することは、皇帝の私僕ひいては皇帝自身への批判にほかならなかつた、ということによつても明らかであらう。加うるに、海關稅收を私利とする專制權力者の認識と、それを不法利得と考へ、その國防強化への轉換を當然のつぐないとする林の認識との間には決定的な差異があつた。したがつて、彼の近代兵

器の採用＝軍備の近代化への提案は、皇帝にとって一顧にも價しないことになり、完全に棄却されるにいたつたのである。

しかし、對英抵抗のために「礮利船堅」＝近代兵器を不可缺の條件とする林則徐の認識と、その實現への志向は、彼の革職後もいささかも變化していない。むしろさらに強固なものとなつていくように思われる。すなわち、彼は、道光二十二年（一八四二）の初め、親友吳子序（翰林院編修吳嘉賓）に宛てた書簡^⑨のなかで、

想い起せば、一昨年小生がお咎めをうけたのち、なお船・砲の二事について、僭越をもちえりみず上奏しました。もしもそのとき（船・砲を）つくりととのえることができたなら、昨年の秋浙江（の戦に）おいて利用に役立つことができたでしょう。今は燎原の勢ですから、これに向かつて近づくことはいよいよ困難となりました。要するに、船・砲・水軍は斷じてすておくことのできない務めです。たとい逆夷が海外に逃げ歸つたとしても、またこのことはすみやかに計畫を立てて海疆の恒久的施策としなければなりません。ましてや、目前の鰐を驅逐し鯨を追ひ拂うのに、これなくして何ができません。……（中略）……ただ私は現在のところ、早速にも、瓶に栓をするようにおのれの口をかたくとざせという戒を守らなければなりません。しかしながら、目的や關心の互いに一致する人々同志では、すぐにでも眞實を吐露せずにはおれません。みずからの愚妄を悔むことしきりです。しかしながら、ひるがえって、（貴下の私に對する）御心配の深さを思いますと、どうしても自分にかくしておくわけにまいりません。くれぐれもこれを祕密にして絶對に他人に言わないで下さい。

と述べ、また、道光二十二年八月（一八四二・九）伊犁流謫の途次、親交のあつた姚春木（姚椿）・王冬壽（王柏心）連名宛ての書簡^⑩には、

ひそかに思いますに、夷を討伐するには、船・砲・水軍の施策をたてませんと、みすみすみずから敗北をまねくことになります。……（中略）……私は一昨年お咎めをうけたのち、なお船・砲のことについて皇帝に極力意見を申し上げました。もしその時、ひたすらこれら船・砲のことにはげんでいたならば、今日またこのような手におえない事態に

ならなかったでしょう。……（中略）……私がこのこと（現在の戦局）についてあれこれ申し述べても、それはまさしく局外者であればこそ言ってもかまわないということなのです。どうか他人には言わないで下さい。

とある。これら親密な関係の人々に宛てた書簡の赤裸々な表現を通じて、林が、對外抵抗のための軍備の近代化を依然として強く志向していたことを改めて確認しておかなければならない。同時に、そこには、林の積極的軍事近代化への提案を全く無視した皇帝への強い不満が表明されており、それは一種の皇帝批判として理解することができるのである。

五 民衆依據と守戦論の歸結——むすびにかえて——

最後に、前節で保留した林則徐の對英抵抗を特徴づける民衆依據の思想にふれなければならない。既述のように、林則徐は、守戦という基本的戦略方針に立って、郷勇による陸地捕捉戦、水勇による火攻さらに海上交戦、を展開する場合、民衆の對英敵視感を積極的に評價し、彼らを組織・訓練して、陸上および海上ゲリラ活動を推進したのであった。彼が、廣東着任直後、外國商人にアヘンの沒收と誓書の提出を要求したとき、彼らに、「民間の丁壯を號召して……その命を制する^④」と告げ、民衆の敵愾心を結集し、彼らと一體となってアヘン禁絶の使命を遂行する態度を表明した。これ以後、彼の在任中のアヘン戦争の全局面を通じて、またそれ以後も、彼の民衆依據の思想は變ることなく一貫されている。

民衆依據の思想を考へる場合、林則徐の民衆認識の特質がどのようなものであったかという問題と同時に、民衆の側が林にどのような對應を示したか、この兩面をあわせて考察しなければならない。

まず、林は、民衆の力をどのように評價していたであろうか。それを特徴的に反映している一つの例は、既出の「燒燬匪船以斷接濟摺」に、

思うに廣東海面の漁船、蛋艇は數えきれないくらい多いのですが、彼らは利を貪るのに命知らずで、遠く外海にまででかけないものではありません。

とあり、また、

私どもはよくよく考えました上で、奸を以て奸を治め、毒を以て毒を攻めることにしました。

とあることであろう。彼は、漁民・蛋民などのアウトロー的分子のなかに、波風のはげしい外海に命知らずで出かけて行く勇氣と能力を認識するとともに、あくまで清朝の官僚として、彼らが、權力體制にとってこれを亂す奸民であり害毒であるとの認識もあわせもっていた。とくに皇帝に對する場合は、奸といい毒という語をしばしば用いている。

しかし、林は、彼らアウトロー的分子を「民人」として積極的に水勇に雇用した。そこに、彼らを奸とし毒とする治者||統治階級としての傳統的認識に立ちながらも、「治奸」「治毒」のすぐれたエネルギーを肯定し、これを利用しようとする認識の前提があったことが指摘されよう。この場合の奸や毒は、中國侵略の主體たるイギリス軍にほかならなかった。したがって、「以奸」「以毒」のアウトロー的分子は、いわゆる體制側に重きをおく觀點からは、決して許容されるべきものではないが、侵略への抵抗に重きをおく立場にたてば、彼らのすぐれた力量は積極的に評價されるべきものとなる。このような認識は、國家・民族の危機を支配體制の危機に優先させる強い危機認識によって規定されなければならない。ここから、道光二十年八月二十九日（一八四〇・九・二四）發の「議覆團練水勇情形摺」に、「粵東の漁人、蛋戸より濱海の居民にいたるまで、多くの人々が海のものを探捕して生計を立てており、風や波の危険をおそれませんし、その住民が水鬼とよんでいるような者がどこにでもおります。」とあるような民衆の勇氣や技能に注目する態度が示現されてくるのである。といつても、林則徐は、對英抵抗の戦力として無條件的に民衆の力量をうけいれたものではなかった。右の「摺」のなかに、彼らを雇募して潛水の技倆を試みに實演させてみたが、「わずかに内海の浅い港でできるだけであり……數丈の深さをもぐり長時間潛伏できる者を求めても、中々見當りませんでした。そこで、はじめてこれまでの傳聞が實際より大げさであることを知りました。」とあるように、みずから實際に調査する方法をとったし、また、「この連中を雇用するのには、流弊も多いので、一時の手段として短期間だけのことにしても、統制には必ず適切な方法をとらなければな

りません。」というように、彼らの弱點を知悉して利用の方法にも慎重を期したのである。

このように民衆の力量を辨別した上で、林則徐は、さきの姚春木・王冬壽宛の書簡で、福建の漳州・泉州・汀州の三郡の民船・商船の力量を高く評價し、そこから徴集された水勇が「敢死の士」であり、「彼らは平日替玉となつて命を捨て、死ぬことはあつても生きることのない連中ですから、今巨資をもつて彼らを募り敵に赴かせますと、生きるか死ぬかどちらかなので、きつと命の限りをつくしましょう。」と述べ、アウトロー的民衆のおそろべき力量をきわめて高く評價し、「今はかりごとを立てるとして、戦船の製造も及ばないなら」彼らを雇用して抵抗しなければならない、と力説したのである。このような林の言葉からは、對英抵抗のための近代兵器の提案が退けられたのち、攻撃戦術の最後のよりどころを、信頼するに足る水勇のすぐれた力量に求めたのである。

一方、林則徐に對する民衆の反應はどうであつたろうか。道光十九年九月初五日（一一・一一）到京の「會奏巡閱澳門情形摺」に、「私どもが道の途中でよく見ておりますと、（マカオの）華民が老人をたすけ幼児をつれて、道をはさんで歡呼の聲をあげました」とあり、また、道光二十年九月二十五日（一〇・二〇）、林の革職の知らせが廣州に傳つたとき、廣東の紳士・商人たちは、彼に頌牌を送つて、彼の偉大な人格と業績を讃えたが、そのなかには、「民はその恵に沾い、夷はその威に畏れる」、「勳功を東粵に留め、恩澤は南天にあまねく行きわたる」、「寛裕溫柔」、「發強剛毅」などの讃辭が見られ、林を惜み慕う心情が十分に理解される。したがつて、彼は廣東在任の全時期を通じて、民衆の深い尊敬をあつめていたということが出来る。林が民衆の信望を高めたのは、廣東着任以前から、民衆の生活と直結した實際的な政治問題と専心取り組み、民衆の救済に全力を傾注したことによ來している。このことについては、筆者が以前に論及したこともあるので省略するが、彼の對英抵抗には、すでに民衆との連帶を可能とする條件が準備されていたというべきである。

このようにして、彼が民衆に依據しつつ對英抵抗を遂行する過程で、近代兵器という不可欠の條件をそなえることができず、さらにイギリスへの對應が失敗に歸した場合、彼は、どのような守戦に思いをいたしていたであらうか。

同じ右の姚春木・王多壽宛の書簡のなかで、彼は、

もし（イギリス軍が）長期にわたって（中國に）居すわるとしたら、恢復の策は、はじめに荊州・襄州（湖北）の要衝を扼し、陝西、四川と連結することによって可能となる。

と述べている。すなわち、彼は對英抵抗の根據地として中國輿地にあたる湖北・陝西・四川を想定し、最後まで抵抗を繼續する戦略を描いていたのである。そして、この戦略構想は、じつに約百年を経て、一九三〇年代に中國國民黨軍により、さらに一九四〇年代に中國共產黨軍により、ともに日本との戦争で、はからずも現實化されたのであった。林則徐の「守戦Ⅱ持久戦論」は、現代においてよみがえったというべきであろう。それは、中國の歴史のなかに系譜として持續されてきたのであろうか。

註

- ① 増田渉『西學東漸と中國事情』（岩波書店 一九七九年二月）。小島啓治『太平天国革命の歴史と思想』（研文出版 一九七八年三月）。同『アジアからみた近代日本』（亞紀書房 一九七八年十一月）。
- ② 『林文忠公政書』 兩廣奏稿 卷四。
- ③ 『林則徐集』日記 道光二十年八月十九日および同九月初六日の條。（中華書局 一九六二年四月）。
- ④ 『林文忠公政書』 兩廣奏稿 卷一。
- ⑤ Morse, H. B. *The International Relations of the Chinese Empire*, vol. I (Shanghai, 1910), pp. 267—268.
- ⑥ Bingham, John Elliot. *Narrative of the Expedition to China, from the Commencement of the War to Its Termination in 1842*, vol. I (London, 1843), p. 312. はつてゝ同様
- ⑦ な記事が、*Chinese Repository*, vol. IX (Canton, 1840), p. 422. にも見える。
- ⑧ *Ibid.*, p. 325.
- ⑨ *Ibid.*, pp. 532—533.
- ⑩ 『林文忠公政書』 兩廣奏稿 卷四。
- ⑪ 同様に誇張的で誤った對英理解は、彼の上奏文中にしばしば見られる。
- ⑫ 胡思庸「論林則徐的思想」『史學月刊』一九五八年四月號。
- ⑬ 『夷氛聞記』卷一（中華書局 一九五九年九月刊 近代史料筆記叢刊）。
- ⑭ 「會奏夷人薙髮鴉片盡數呈繳摺」『林文忠公政書』 使粵奏稿 卷一。

- 15 『道光洋艘征撫記』卷上。
- 16 「暎夷續來兵船情形片」『林文忠公政書』兩廣奏稿 卷三。
註④⑬に詳しい。
- 17 註④。
- 18 註④。
- 19 「焚剿夷船擒獲漢奸摺」『林文忠公政書』兩廣奏稿 卷二。
- 20 『夷氛聞記』卷二に、「小火船を鐵釘で夷船に釘附ける方法は、もと鄭芝龍に出たものである。」という。
- 21 「附奏東西各洋越竄夷船嚴行懲辦片」『林文忠公政書』使粵奏稿 卷三。
- 22 *Chinese Repository*, vol. VIII (Canton, 1840), p. 442.
註④。
- 23 註④。
- 24 註④。
- 25 『籌辦夷務始末』道光朝 卷之十 道光二十年三月丁巳の條。
- 26 註④。
- 27 註④。
- 28 中國史學會主編 中國近代史資料叢刊 第一種『鴉片戰爭』第二冊 四五三頁。
- 29 *Chinese Repository* vol. IX, p. 107.
- 30 「林少穆制府遣戍伊犁行次蘭州致姚春木王冬壽書」『鴉片戰爭』第二冊 五六七—五七〇頁。
- 31 『林則徐集』日記 道光二十一年二月初九日の條。
- 32 同前 道光二十一年二月十二日の條。
- 33 『夷氛聞記』卷三。
註③。
- 34 註③。
- 35 註③。
- 36 註③。
- 37 註③。
- 38 「暎逆兵船續籌剿堵摺」『林文忠公政書』兩粵奏稿 卷四。
- 39 「關開地方礮石洋面疊將逆夷擊退摺」『林文忠公政書』兩廣奏稿 卷四。
- 40 「林文忠公政書」使粵奏稿 卷七。
- 41 『籌辦夷務始末』道光朝 卷之十二 道光二十年七月庚戌の條。
- 42 同前 卷之十 道光二十年五月庚子の條。
- 43 「尖沙嘴官涌添建礮臺摺」『林文忠公政書』兩廣奏稿 卷二。
- 44 註④。
- 45 註④。
- 46 「林文忠公政書」使粵奏稿 卷二。
- 47 『籌辦夷務始末』道光朝 卷之八 道光十九年六月辛卯の條。
- 48 註④。
- 49 註④。
- 50 註④。
- 51 註④。
- 52 註④。
- 53 『籌辦夷務始末』道光朝 卷之十一 道光二十年七月丁未の條。
- 54 註③。
- 55 『海國圖志』卷三十五。
- 56 呂實強『中國早期的輪船經營』（中央研究院近代史研究所中華民國五十一年六月）九—一二頁。

- ⑤⑦ Waley, A., *The Opium War Through Chinese Eyes*, (London, 1958), pp. 48, 74, 92, 140.
- Rawlinson, John L., *China's Struggle for Naval Development*, (Harvard University Press, 1967), p. 17.
- Beeching, Gack., *The Chinese Opium War* (London, 1975), pp. 101~2, 152.
- ⑤⑧ Bernard, W. D. and W. H. Hall, *Narrative of the Voyages and Services of the Nemesis from 1840 to 1843, and of the Combined Naval and Military Operations in China*, vol. I (London, 1844), pp. 353, 359. Waley, op. cit., p. 140.
- ⑤⑨ Bingham, op. cit., p. 134.
- ⑥⑩ Rawlinson, op. cit., p. 19.
- ⑥⑪ 註⑤⑥
- ⑥⑫ 『籌辦夷務始末』 道光朝 卷之十六 道光二十年十月癸酉の條。
- ⑥⑬ 『林文忠公政書』 兩廣奏稿 卷三。
- ⑥⑭ 註⑥⑬。
- ⑥⑮ 拙稿「アヘン戦争時期における抵抗派の成立過程」『東アジア近代史の研究』(御茶の水書房一九六七年二月)、拙稿「林則徐の進歩性に關する一考察」『山崎先生退官記念東洋史學論集』(昭和四十二年十二月)。
- ⑥⑯ Waley, op. cit., p. 114.
- ⑥⑰ 「林則徐復吳子序編修書」『歷代名人書札續編』卷二(臺灣商務印書館 中華民國五十七年九月)。
- ⑥⑱ 註⑥⑰。
- ⑥⑲ 「諭各國夷人呈繳煙土稿」『信及錄』己亥二月初四日。
- ⑥⑳ 『林文忠公政書』兩廣奏稿 卷四。
- ⑥㉑ 同右 使粵奏稿 卷六。
- ⑥㉒ 『林則徐集』日記 道光二十年九月二十五日の條。
- ⑥㉓ 註⑥⑲。

the "learning of the emperors and kings" (*ti-wang chih hsüeh* 帝王之學) or *ti-hsüeh* 帝學 for short. Among the Four Books as commented on by Chu Hsi, they particularly stressed the Great Learning (*Ta hsüeh* 大學) and in the eight-step method of this work they particularly emphasized the rectification of the mind-and-heart (*cheng-hsin* 正心) as the way to clarify and manifest the moral nature, which was the key to the governance of the world.

These doctrines underlay the policies of the Neo-Confucian reformers at Qubilai's court who became entrusted with the new system of universal education adopted by the latter. Although Neo-Confucians opposed the revival of the old-style Sung and Chin examinations, the spread of the new education led to the adoption in 1315 of reformed examinations based primarily on the Four Books and Chu's commentaries. The Ming later ratified the form and content of these examinations, making it a comprehensive system of education and recruitment, reinforced later by thought-control measures, to create the full-fledged state orthodoxy of later times.

Lin Tse-hsü's 林則徐 Policy and Thought of Resistance against the British

Tanaka Masayoshi

Lin Tse-hsü planned a defensive war, meaning a protracted struggle ultimately, in his policy against the British. His strategy depended basically upon people and laid stress on the value of naval militia composed of outlaws as fishermen and *tan-min* 蛋民 on the coasts of Kwangtung and Fukien. At the same time, recognizing the power of modern British weapons, he intended to resist the invasion by actively utilising them. Accordingly, he memorialized the throne the urgent need to produce sophisticated cannons and construct military vessels. He also suggested that the fund for them should be provided from the Canton Maritime Customs. His proposal shows his progressiveness in recognizing the Western world, and in this respect he was an exception among Chinese bureaucrats of the time.

Emperor Tao-kuang 道光帝, however, rejected with anger Lin's pro-

posals. Threatened by the British expeditionary fleet, the Peking Court had to relieve him of the imperial commission, and he was deported to Ili 伊犁. At that time, he envisioned a protracted struggle in case the Chinese resistance policy would fail and Chinese coast would be occupied by the British force, using the interior provinces of Hupeh, Shensi and Szuchwan as bases.

The Confucian School 儒家 and the Confucian Religion 儒教

Jen Chi-yü

The thought of Confucius, which aimed at restoring the Chou slave society, was a product of anachronism. Confucius himself, however, was an erudite scholar, historiographer, and educator. His greatest achievement lied in raising not a few able disciples. Thanks to their number and influence, his school could become the leading intellectual group of the Warring States period. The Confucian school was divided among eight different lines of thought, including the idealistic line of Mencius and the materialistic line of Hsün-tzu 荀子. They shared, nevertheless, the same opinion in so far as supporting the feudalistic Tsung-fa 宗法 system and class structure.

Confucius represented, essentially, the conservative wing of the slave society. The feudalistic societies of later times, however, honoured him as a sage. Both the slave and feudalistic society were aristocratic in nature. Moreover, the Tsung-fa system since the Western Chou continued to form the basis of feudalistic society. With some alterations, therefore, Confucius's thought could still be applied to the feudalistic society. The Confucian religion came about in such way.

The alteration on Confucius and his thought had been done two times in history, The first was during the Western Han. Carried out by Tung Chung-shu 董仲舒 with the aim of founding a religion suitable for the purpose of Han ruling class, it enjoyed the full support of Emperor Wu-ti 武帝. The second, during the Sung, developed eventually into the Li-hsüeh 理學 of Sung and Ming. This one was with grave implication,